

Yoshiyuki Sahashi

キャリア25年が築いた絶対的な信頼  
マイケル・ランドウを始めとする  
一流ギタリストが顧客リストに名を連ねる  
ジェームズ・タイラー・ギターズ

カスタム・ビルダーの最高峰は誰か？  
おそらく何通りもの答えがあるのだろうか、  
ジェームズ・タイラーと答える人が  
何人もいるだろうことは想像がつかう。  
実際に使っている人は、  
とことん惚れ込む逸品だとの評判が高い。  
近年、我が国でも高級指向店などで  
にわかにも人気を集めていたが、  
今では熱心なリピーターまで持つという。  
今回、試奏に選んだのは、  
スタジオ・エリート・シリーズの2本と、  
クラシック・カスタムである。

ジェームズ・タイラーと言えば、真っ先に思い浮かぶ  
のはマイケル・ランドウとの緊密な関係だろう。ミュ  
ージシャンがギター・ビルダーにギターを注文するとい  
うごく当たり前の図式が、これほど注目される例も珍しい。  
それは、ミュージシャンには“一流の”，ビルダーには“凄  
腕の”という形容詞がつけたいればこそである。

ノース・ハリウッドでリペア・ショップを開いていた  
タイラーのもとへランドウが初めてやってきたのは84年  
頃のこと。その時分、タイラーはLAのスタジオ・ミュ  
ージシャンのためのリペアと製作に忙しい日々を送って  
いた。ランドウが最初に頼んだ仕事はメイン・ギターのリ  
フレットだったという。その仕事がいまく気に入ったラ  
ンドウは、たびたびタイラーのショップを訪れるよう  
になり、翌年にはカスタム・ギターの製作にまで話が及ぶ。  
初めはビンテージ・テイストのギターを望んでいたラン  
ドウであったが、次第にその好みは独自のサウンドを持  
つものへと変わっていく。それを実現するためのアイ  
デアは、タイラーの頭の中にはたくさん詰まっていた。  
こうしてランドウのためのギターが次々と作られてい  
くことになる。これと並行して、LA周辺のミュージシャン  
が数多くタイラーのもとを訪れ、カスタム・ギターの注  
文を出していった。今では、ティーン・パークス、ダン  
・ハフ、アンディ・モーストなどスタジオ系の大御所がユ  
ーザー・リストに名を連ねる。タイラーは昨年ビルダー  
生活25周年を迎えた。

タイラー・ギターの中核をなすのはスタジオ・エリ  
ート・シリーズである。長年のリペアとカスタマイズの経  
験から、プレイヤーがどういったギターを望んでいるかを  
的確につかみ取ったタイラーが、持てるアイデアと技  
術のすべてを集約したシリーズだ。これは、スタジオな  
どに1本だけ持って行けば必要な音はすべて出せるのが  
コンセプトだという。ボディにマムヨという材を用い、  
ミッド・ブースターとハムキャンセル用ピックアップを  
搭載するという基本仕様をもとにさまざまなオーダーが  
可能である。

ビンテージ・ストラトのサウンドと  
歪みのサウンドの良さを  
同居させてる感じですね。

このギター、人気あるのわかるね。使いやす  
い。このモデルに関して言うと、ビンテージ・ス  
トラトを基調にして、操作性だけを現代的にし  
ている。例によって、個人的には大きなフレットは  
嫌いですが、その分、サステインとか音の粒の揃  
い方とか、すごくいい。そういうところは現代的  
なのに、サウンド自体はピックアップのせいとか、  
ビンテージの感じがしてます。ハムバッカーガリ  
アに付いてるのは、ライブなどにおける柔軟性を  
意識してるんだと思う。ビンテージ・ストラトの  
サウンドと歪みのサウンドの良さを同居させてる  
感じですね。このハムバッカーは、いかにもフェ  
ンダーに付いてる感じのものです。レス・ポール  
みたいな感じじゃない。ただ、惜しいと思うのは、  
ハムバッカーを付けるならリアにトーン・コン  
トロールを設けてほしかった。



CLASSIC CUSTOM Jim Burst

ビンテージ・ストラト・サウンドの再現を意図したクラシック・カスタムアルダー・ボディにリンディ・フ  
レーリンのカスタム・ピックアップから生み出されるサウンドはまさにオリジナル。リア・ピックアップにはもち  
ろんシングルのコイルを選ぶこともできる。特徴的なパープルのフィニッシュは、ジム・パーストと呼ばれる。フ  
レットはサステインのある本格的なタイプだが、オリジナル風の細めのタイプもオーダー可能。

- ボディ・アルダー・ネック・メイプル・指板・ローズウッド・フレット数・22
- ピックアップ・タイラー・スベック・リンディ・シングルのコイル・ラロント、ミドル、
- 同ハムバッキング(ワック)・コントロール・1ポリウム、2トーン、5ウェイリセレクトター・スイッチ
- ブリッジ・ウィルキンソンVS-1100・ペグ・シムバセ製

●価格・490,000円





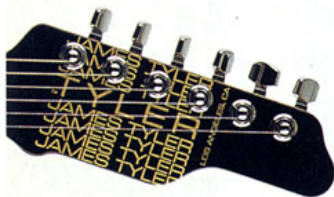


これだったらアンプに直でいい。  
ディストーション派向けですね。  
基本的な音はブライトで、西海岸な感じ。

マーシャルとかを使ったディストーション・サウンドを完全に意識しています。これだったら、アンプに直でもいいもんね。アンプで歪みっぽいセッティングにしておいて、プースターでだんだん上げていけるようにしたんだと思う。ドンシャリみたいなセッティングでまずアウトさせて、アンプで基本セッティングを決めたあとで、ミッドをブーストできるようにしてるんです。絶対ディストーション派向け。ツマミを回してブースト具合を調節するだけでなく、プッシュ/プッシュ・スイッチみたいな方式にして、押せば一発でプースターが入るようになってればもっと良かったと思います。ミニ・スイッチ一発で、ハムバックングに切り替わるところもまさにディストーション派向けです。基本的な音は随分ブライトですね。1本目に比べると相当ブライトです。なんか西海岸な感じ。

◎ジェームズ・タイラーの特徴

写真A

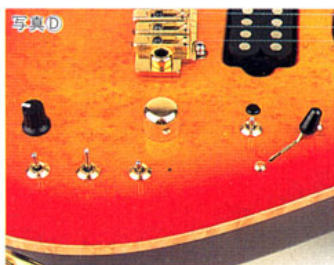


写真Aはヘッド。ロゴをたくさん入れているのは、グラフィック・デザインとしてとらえているからだという。

写真Bはスタジオ・エリート・テラックス（次頁）のコントロール・キャビティ内。ハムキャンセル用のシングルコイルが重ねて収められている。これらはマグネットを持たない。

写真Cはスタジオ・エリートのコントロール。ピックアップ近くのツマミはボリューム、ピックアップ端のツマミはプリアンプ・ボリューム、三つ並ぶ白いボタンはそれぞれのピックアップに対応するシリーズ/スプリット・ボタン（ハムキャンセルをシリーズ接続にするスイッチ。リアのハムバックカーはタップになる）、レバー・スイッチは5段切り換えのピックアップ・セレクター、ミニ・スイッチはリード/リズム・スイッチ（セレクターがどのポジションにあっても、これをオンにすると一発でリアのハムバックカーに切り換わる）となっている。

写真Dはスタジオ・エリート・テラックスのコントロール。ブリッジ脇のツマミはボリューム、もうひとつがプリアンプ・ボリューム、3つ並ぶミニ・スイッチはそれぞれのピックアップに対応するシリーズ/スプリット/パラレル・スイッチ（こちらはパラレル接続もできる）、レバー・スイッチは5段切り換えのピックアップ・セレクター、隣のミニ・スイッチはリード/リズム・スイッチ、その隣の黒ボタンはプースターのオン/オフ・スイッチとなっている。



STUDIO ELITE Jim Vomit

1本のギターでさまざまなサウンドを出せるようにというコンセプトを持つスタジオ・エリート・シリーズの1本。シングル+シングル+ハムバックングのピックアップを5段階でセレクトできるのももちろん、ピックアップの下に内蔵されたハムキャンセル用のシングルコイルが、ミニ・スイッチの切り換えてフロント及ミッド・ピックアップとシリーズ接続となり、さらに多彩なサウンドを生み出す。ミッド・プースターも内蔵。

- ボディ・アム・ネック・メイプル・指板・ローズウッド・レット数・22
- ピックアップ・オリジナル・シングルコイル・ラロント、ミッド、同ハムバックング（リア）、ハムキャンセル用シングルコイル×2
- コントロール・1ボリューム、5ウェイピックアップ・セレクター、ミニ・スイッチの切り換えてフロント及ミッド・ピックアップとシリーズ接続となり、さらに多彩なサウンドを生み出す。ミッド・プースターも内蔵
- シリーズ/スプリット・ボタン×3、リード/リズム・スイッチ、プリアンプ・ボリューム、ミニ・スイッチ
- ブリッジ・ウィールキンソンVSI1000・ペグ・シャイター製
- 価格・540,000円







湿ったところがなくて、明るい音。  
これ1本でいろんなことが  
こなせるって良さがある。

これフュージョン系ですね！ フュージョンばいものも  
できますっていうセッションマン向けだと思う。ポール・  
ジャクソンJr.とかマイケル・トンブソンとかね。コーラ  
ス系、ディレイ系は必須って感じ。ラインもOKです(笑)。  
オール・イン・ワンな感じっていうのか、それこそこれ1  
本持って行けば、いろんなことがこなせるっていう良さ  
がある。音は曇れない感じですよ。すごくちゃんとしてる。西  
海岸系ですね。カラッとして。土地のミュージシャンの  
アドバイスを受けながら作ったんだらうって感じがするな。  
湿ったところがなくて、明るい音してる。ネックの感じは握  
りやすく弾きやすくできて。大きいフレットはあまり  
好きじゃないけど。でも、大きなフレットはポピュラーだ  
し、このブリッジとペグの組み合わせも流行ってるらしい  
から、そういう流行りものも取り入れつついい感じですよ。



STUDIO ELITE DELUXE Cherry Sunburst

スタジオ・エリート・シリーズの上級機種。ボディ材のマムヨはシリーズ共通のスペックで、レゾナンスに優  
れ、ミッド・レンジが前に出る特徴を持つという。本器もハムキャンセラーを2個持つが、ここではコントロー  
ル・キャビティ内に収められている。これはフロント及びミドル・ピックアップと、シリーズ/バラレルとちら  
の配線にもすることが可能。ミッド・プリアンプ内蔵。

- ボディ・フュージョン系・メイプル(トップ)・マヨ(バック)・ネック・メイプル
- ピックアップ・オリジナル・シングルコイル(フロント・ミッド)・同ハムバッキング(リア)・ハムキャンセラー用シングルコイルx2
- コントロール・ボリューム・5ウェイセレクター・スイッチ・プリamp
- プリamp・プリセット・ボタン、シリーズ/スプリット/バラレル・スイッチ、リッド/リズム・リズム・スイッチ
- ブリッジ・ウィルキンソンVSI000・ペグ・ジュバール製・価格...625,000円

◎試奏を終えて



試奏に使用したのは、フェンダー・コ  
ンサート・アンプ。

エフェクターはMXRのダイナコンプとボスのOD-1を  
使用。左端はコルグのボリューム・ペダル。

- 3本弾いてみた印象はどうでしたか？  
○タイラーさんは、きっといろいろ作れる人なんだね。プロの有名  
プレイヤーというんなアイデアを交換し合って、彼らが使いや  
すいようなものを作ってるんじゃないですか。でも、根本的な考え方  
は、新しい楽器を作るというよりは、改造していいものにしていく  
ということだと思う。それがポイントだね。もともとあったものを  
もうちょっととかならなくて改造していったら、こうなっ  
ちゃったという。ちょっとオリジナルなものになっていったという  
感じかもしれない。改造系の人ですね。
- タイラーはビンテージのフェンダーのように、音がいい具合に  
響れるという評判がありますが。  
○ずっとこのシリーズで弾いてきたものの中では、確かに響れるか  
もしれない。でも、特別響れるギターだとは思わないけど。それ、イメージだと思う。  
マイケル・ランドウとかのイメージで言ってるんじゃないかな。ランドウをやりたい人は  
普通マッシュアルに突っ込んでみましょう(笑)。それは単なる、これを使ってるプレイヤーのイ  
メージだと思うけど。
- どの辺がいいと思いますか？  
○クオリティは物凄く高いですよ。基本的にいいと思うことは、たくさんある音のバリエ  
ーションの中に、ビンテージのいわゆるストラトらしい音がちゃんと含まれてるってこと。  
その音はもちろんな実現した上でいろいろできますっていう考えなんだと思う。例え  
ば、先々月のブライアン・ムーアなんかは、はるか彼方にある感じですよ。このサイケの  
ギターとか、いろんな音色が出せるし、いろんな音が出て実用的になってるじゃないで  
すか。そのいくつかあるバリエーションの中に、いわゆるストラトの音も含まれる点は  
すごくいいと思うよ。あと、やっぱりエフェクターのノリは良かったです。そういうところ  
を改善していかなかったら、ビンテージと対決できないもんね。僕は買わなかったけど、  
昔、バリエーションが出てきた頃の印象と似てるなあ。
- いろんな音が出せるという意味では、スタジオでは便利なんじゃないですか？  
○便利だと思いますよ。操作性という意味でも本当に使いやすいから。もう少し値段が安  
かったら、アマチュアの人にも薦められるけど、ちょっと値段が高いかな。本当にプロユ  
ースというか、セッションマン向けだと思う。これならツアーとかでもオールマイティに  
対応できるから、いいと思いますね。ただ、僕はそういうタイプじゃないから。ストラト  
にハムバッカー付けるくらいなら、ライブでもレス・ポールに交換する人だからね(笑)。  
燃費悪くてもアメ車乗るって感じ。これで20万円台とかだったら、薦めるな。いろんな音  
のバリエーションがあるから、すごく楽しいと思うし。
- 今まで弾いてきたサドウスキーとかドン・グロッシュとかとの明確な違いはありますか？  
○こっちのかもしれない。ドン・グロッシュはいいんだけど、こだわり派  
用って感じがする。オレ、この音一発でいけば、みたいな。こっちはもっとポップな  
感じがします。ある方向のサウンドに関してはもうバッチリという狙いではなく、カバ  
ーする範囲が広そうだから。

佐橋佳幸  
(さしよしゆき)  
1961年生まれとに  
かく多忙なセッション  
ギタリスト。山崎十平  
松八千代(元ランバ)  
のユニット、SOYでの  
活動について。2月  
にはマキシ・シンダ  
ルが、しばらくしてア  
ルバムが発売される予  
定である。ごうご期待。





Interview 翻訳: 江口達也

# James Tyler

常に顧客の声を聞き入れて、彼らが求めているものを確実に作るようにしています。

ジェームズ・タイラー

1951年、ロサンゼルス生まれ。幼少の頃より手先が起用で、身のまわりのものを分解しては元通りにするというをやっていた。いつしかギターを弾くようになると、自然と修理もするようになる。ギター・ビルダーになるつもりは特になく、大学では写真を専攻したが、友人にギターの修理を頼まれたりしているうちに、本気で取り組むようになる。72年にショップを開業。LA周辺のスタジオ・ミュージシャンのためのリペアと製作を行なう。昨年、ビルダー生活25周年を迎えた。



THE JAMES TYLER GUITARS



マムヨ材がスタジオ特有の

グロッシーなサウンドを生んだんです。

●スタジオ・エリート・シリーズについてお聞きします。このシリーズはマムヨという材を使用していますが、これはどのような材で、どのような特徴があるのか教えてください。

○スタジオ・エリート・シリーズのすべてのモデルには、このマムヨが使われています。何年間もいろんな材を使ってみた経験から言うと、多くの材は見た目は良くても、ギターの材としては相応しくありません。しかし、この材を試してみたところ、その鳴りが気に入りましたし、軽く、そしてなおかつ硬いことがわかったんです。それから、この材をみんなに薦めるようになりました。特に80年代、LAのスタジオ・シーンが最も盛り上がっていた頃、誰もがブラッドショウのサウンド・システムを使って、ギターにはたくさんのスイッチや、プリアンプを付けていましたよ。そんな状況の中で、マムヨはレゾナンスに優れ、ミッド・レンジが出るので、グロッシー (glossy: 「艶のある」という意味) なスタジオ特有のサウンドを生んだんです。そして、そのサウンドはこの材に拠るところが大きかったというのが、私がこの材を使う理由です。

●ピックアップは自分でも作るんですか?

○スタジオ・エリート・シリーズの標準的なモデルには、オリジナルのピックアップを乗せています。

●では、リンディ・フレイリンやダンカンのピックアップは顧客の要望によって取り付けられるわけですか?

○そうです。私はこれが一番良いピックアップですよと、これがあなたの求めているサウンドですよとかが言うのは好きではないので、彼らが特別な要望を持っている場合、それに応じるようにしています。クラシック・モデルはビンテージ・サウンドが基調となっているので、それには最もビンテージらしいサウンドを持っているリンディ・フレイリンを使っています。サイケデリック・ヴォーミットとバーニング・ウォーターにはセイモア・ダンカンが乗っていますが、その理由はマイケル・ランドウが前から使ってきたピックアップだからです。

●マイケル・ランドウが現在使用しているバーニング・ウォーターのコンセプトを教えてください。

○マイケルが望んだものです。マイケル・ランドウのシグネチャー・モデルとしてはサイケデリック・ヴォーミットがあるんですが、ある日、彼が私のところにやって来て、こう言ったんです。もう、このカラーリングに飽きてしまったから、何か違うのはいないかってね。その頃、彼はバーニング・ウォーターというバンドをやっていたんですが、メイプル・ネックをやめて、ローズ指板に変えたいということ、そしてブリッジ・ポジションにフルサイズのハムバッカーを付けたいという新たな要望が出たところでもあったんです。そこで私は燃えている水をイメージした、火と煙が水面を覆っているようなカラーリングを施し、彼が望んだ仕様を盛り込んだ新しいギターを作りました。こうしてバーニング・ウォーターが出来上がったのです。これは、マイケルが望んだ、サイケデリック・ヴォーミットの第2弾という感じですね。

私はどんなミュージシャンに対しても

こういうサウンドを出すべきだなんて言いません。

●近年、ビンテージ・フェンダーのサウンドを現代に再現しようとするビルダーが増えましたが、あなたはこの傾向をどう思いますか?

○それが求められているってことなんですよ。クラシック・モデルはだいぶ前に作り始めたんですが、当時のマーケットを見渡してみると、スーパー・ハイテク時代も一段落して、ビンテージに向かいつつあるところでした。そこで、私はクラシックを作り始めたんです。それが、これから主流になって行くだろうと見たからです。結局、それがみんなの求めたものでしたし、そのサウンドがポピュラーになりましたよね。

●このような状況の中で、ジェームズ・タイラーのギター・サウンドの特徴とはどうあるべきなのでしょう?

○難しい質問ですね。…私はどんなミュージシャンに対しても、こういうサウンドを出すべきだなんて言いません。サウンドは彼らが作るものであるべきです。スタジオ・エリート・シリーズは、スタジオに必要なサウンドが出せるように製作しましたし、クラシック・シリーズは、ビンテージ・サウンドが出せるように製作しました。こうすれば、自分が欲しいサウンドを選ぶことができます。これが、私の答えです。

●現在の工房の規模を教えてください。

○工房の広さは、2,500スクエア・フィートです。製作に関しては、基本的なルーティングには機械を使っていますが、最終的なシェイピングは手で行なっています。製作に当たっている人間の数は、私を含めふたりです。以前は4、5人ほどいたんですが、ですから、私自身、以前よりも仕事が増えてしまいましたよ。月産のペースは約10本ですね。私としては、20本は作りたと思っています。

●塗装に関する考え方を聞かせてください。

○大抵の場合、塗料の質に拠るところが大きいですよね。アメリカには環境保護庁というのがあって、化学物質等の汚染に関する、すべての条例を出しているんです。そこでは毎年、その年ごとの規準値が示されるので、塗装などに関わる業者は、その規格を毎年変更しなくてはなりません。ですから、アメリカでは塗装 (の方法や内容) が、常に変わってしまうんです。こんなわけで、どの塗装が一番だとか、そうでないとかは言えませんね。いつも違いますから。ただ言えるのは、少なくともアメリカ国内では、上質のラッカーはもう手に入らなくなりました。現在、入手可能なラッカーは、20数年前と比べると、使いものになりません。柔らかすぎて、全然硬くならないですよ。ポリエステル、それも上質のポリエステル、ポリウレタンの方が、現在手に入るどのラッカーよりも優れているでしょう。

●エレクトリック・ギターのサウンドに最も影響を与えるのは何だと思いますか?

○何かひとつのものというのではなく、ネック、ボディ、ピックアップ、ブリッジといったすべての要素のコンビネーションによってサウンドが決定されると思います。もし、いつもとは違う材でギターを作ったら、私はピックアップも変えるでしょうね。ある種のピックアップはアッシュと組み合わされた時に最もベストなサウンドを生んだら、また別のピックアップはアルターと組み合わせられた時にそうだったりしますからね。要は、それぞれの要素のコンビネーションなんですよ。

●ギター作りの哲学はお持ちですか?

○考えたこともありませんね。肝心なことは、カスタマーの声を傾けるということでしょうね。ビルダーが仕事を失ったり、人気を失ってしまうのは、それを怠った結果なんだと思います。私は常にカスタマーの声を聞き入れて、彼らが求めているものを確実に作るようにしています。かなり名前の通ったギター・

ビルダーの中には、カスタマーがやって来ると、もうすべてわかったような顔をして、“あなたが求めているものはわかっています。これです” っていう感じでやる人間もいるようですが、私はそんなことはしませんよ。

●ギター作りに関して、新たな試みなどはありますか?

○ここ何年か、アコースティック・ギターの製作に取り組んでいるところです。すでにプロトタイプがいくつかあるんですが、半分しか出来上がっていないものの中にはあります。でも、まだひとつも完成までには至っていない状態です。できれば、98年にはオリジナルのアコースティック・ギターを完成させたいと思っています。

●ソリッド・ギターを製作することとアコースティック・ギターを製作することは、まったく別のことだと思うのですが、今、どうしてアコースティックを作りたいと思うのですか?

○特別な理由はありませんね。ただ、作ってみたいんです。アコースティック・ギターというものは、私にとってみれば、ロウ (生の、加工されていない) ギターです。よりギターに近いと言えはいいんでしょうか……説明するのは難しいんですけど……パーソナル・フィーリングというものがあるんですよ。私が自分のマーティンを手にとって弾いてみる時、クラフツマンシップ、クラフト・ワーク、そしてマジックが感じられるんですね。エレクトリック・ギターは、ネジでくっつけられているって感じですから。それから、フル・サイズのジャズ・ギターも作ってみたいですね。きっと、ギター・ビルダーとしての実績になりますからね。



カリフォルニア州ヴァン・ナイズにあるワークショップにて作業中のジム・タイラー。現在、ジョー・サントス (下写真) とふたりですべての製作を行なっている。



バーニング・ウォーターのボディをルーティングしているところ。



サンディング・ルームにてネックをサンディングしているところ。